



Newsletter

Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility

Contents

心は孤独な拠点リーダー The heart is a lonely leader	1
第5回 京都大学—慶應義塾大学グローバルCOE共催シンポジウム 『こころ』を知る、『こころ』を活かす	2
国際シンポジウム 医療人類学の最前線VI：診断の揺らぎ 鬱のジェンダー&こどもの心と病 ～精神医学と人類学の対話から～ 報告	3
fMRIと脳の講習会 Seminar Series on Brain Science	4
Kant's Transcendental Idealism in Focus Part IV Jens Timmermann 博士講演会 “Kantian Dilemmas? Moral Conflict in Kantian Ethics” 論理学・数学の哲学セミナー The Philosophy of Logic and Mathematics Seminar	5
慶應—南フロリダ大 Keio-South Florida Joint Seminar	6
第4回 Keio-Gachon NRI ジョイントシンポジウム The 4th Keio-Gachon NRI Joint Symposium 2011 年度プロジェクト科目報告会 Oral Presentations by Graduate Students in Project Course 2011	7
平成 23 年度若手研究成果報告会 Annual Seminar of Young Researchers	8
活動報告	9
事務局だより	10 ~ 12

心は孤独な拠点リーダー¹⁾

The heart is a lonely leader

渡辺 茂

Shigeru Watanabe



「論理と感性の先端的教育研究拠点」拠点リーダー

Program leader, Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility

米国に移って長い友人からこんな話を聞いたことがある。「移った当初はアスペルガーを疑わせるような教授ばかりだったが、今や彼らは姿を消し、口八丁手八丁のビジネスマンのような教授ばかりになった」そうだろうと思う。科学研究はいまや一つの事業であり、そこで求められる資質の多くは商業世界で求められる資質に近い。そうなる研究そのものより、事業の方により興味を覚える人間が出てくるのもやむを得ないことである。

一方、僕は今や絶滅危惧種である典型的アスペルガー型研究者なのだ。僕はたった一人で問題を考え、たった一人で実験をし、たった一人でデータを見るのが好きなのだ。自分と、世界から自分を切り取った残りが静かに対峙する荒涼たる世界が僕の故郷だ。拠点の研究成果の中には僕が若い人の力を借りずに一人で完成させたものが幾つかある。しかし、見方によっては随分と嫌味な老人でもあるし、第一、源平合戦の頃ならいざ知らず、大將が単騎斬り込みをかけているようではとても近代的な組織とはいえない。この点においても僕は拠点リーダーとしての資質を著しく欠いていたと言わざるをえない。それでもなんとかやってこられたのは周囲が助けてくれたからなのだが、僕自身の中にも、何であれ任務の遂行に動を感じる武家の心意気が残っていたのかもしれない。

もちろん、僕は嫌々拠点の仕事をしていた訳ではない。この拠点がなければ出来なかったことは多いし、とりわけ将来ある若い研究者に研究の場を提供することができたことは僕の研究者としての人生における望外の喜びだった。彼らの武運長久を祈ってやまない。グローバル COE のプログラムは拠点の形成までが目的である。その後は大学に委ねられている訳だが、紅旗征伐拠点維持吾事に非ざれば²⁾、これを論じない。

そろそろ紙数が尽きてきた。夕闇が近づき、拠点から見える東京タワーにも照明が灯った。最後に、世話になった諸君に謝意を表そう。まずは拠点を支えてくれた歴代の事務局の諸君や慶應義塾大学研究支援センターの諸君に感謝を述べたい。この風変わりな拠点リーダーを良く支えてくれたと思う。また、活動の実体を担ってくれた事業推進担当者や研究員の諸君にも心より感謝する。ここでの経験がやがて諸君がPIになった時の拠点経営に活かされれば幸いである。そして、僕は今こそあの荒野へと戻って行こう、Alleingänger³⁾として。

1) Carson McCullers 著 “The heart is a lonely hunter” の邦訳「心は孤独な狩人」から採った。

2) 言うまでもなく定家「明月記」からの借用である。

3) 独行者を意味する独逸語だが、特に山岳登攀において仲間とザイルを結ぶことなしに単独登頂を目指す者のこと。

Science became a kind of business now, so many of the desired traits of researchers is close to the desired traits in the commercial world. Meanwhile, I'm a researcher of the classic Asperger's type, an endangered species. I love to think the problem alone, run experiments without assistants, and analyze the data by myself. My spiritual home ground is such a desolate field. I have to say seriously that I lack the qualities of a research team leader in this aspect. Still, I have done my jobs with the help of the surrounding people and it may be that the spirit of the samurai was left me feeling an honor to perform my duties. Finally, I thank to all members of CARLS, both scientists and supporting staffs, and now I go back to the wilderness as ein Alleingänger.

第5回 京都大学—慶應義塾大学グローバルCOE 共催シンポジウム

『こころ』を知る、『こころ』を活かす

(2012年1月7日 三田キャンパス東館6階G-Sec Lab.)

2012年1月7日「第5回 京都大学—慶應義塾大学グローバルCOE共催シンポジウム『こころ』を知る、『こころ』を活かす」と題するシンポジウムが、慶大・三田キャンパスで開催された。

第一部では、山本淳一教授（臨床発達科学・慶大）の司会進行の下、各拠点リーダーから以下の報告が行われた。

慶大「論理と感性の先端的教育研究拠点」の拠点リーダー渡辺茂教授（生物心理学）は、「美を求める心の起源を知る」と題する講演で、きわめて人間的な活動とされる芸術鑑賞について、動物を対象に行った実験結果を報告し、美を感じる心の普遍性について論じた。

京大「心が活きる教育のための国際的拠点」拠点リーダー子安増生教授（発達心理学）は「幸福感を紡ぐ教育」と題する講演で、健康や経済状態などから算出される国の「幸福度」が、必ずしも人々の主観的な「幸福感」と一致しないことを指摘し、世界13カ国の8千人を対象にして行った国際比較調査結果から、人はどのようなときに「幸福感」を感じられるのかについて論じた。

第二部では、杉本均教授（比較教育学：京大）の司会進行の下、4つの報告が行われた。

北中淳子准教授（医療人類学・慶大）は「鬱の時代、疲弊する身体：ローカル・サイエンスへ向けて」と題した報告で、日本のうつ病観の歴史的変遷について述べ、ストレスの病として捉える際の問題点を指摘した。

杉万俊夫教授（グループ・ダイナミクス・京大）は、「共に育むコミュニティの創造」と題する講演で、数十年にわたって展開されてきた過疎地域の活性化運動について報告し、再生されたコミュニティの力が、今回の震災時にどのように活きたのかについて論じた。

梅田聡准教授（認知神経科学：慶大）は、「感情を生み出す脳と身体メカニズム」というタイトルで講演を行い、従来の、脳から身体へのトップダウン的理解に対して、身体から脳への働きかけを明らかにする最新の研究成果を報告し、神経科学の新たな展望を示した。

桑原知子教授（臨床心理学：京大）は、「こころに聴く、こころを生かす—心理臨床の立場から—」と題された講演で、心理療法の実証的研究から、カウンセリングという場で何が起きているのか——例えばそこでの身体動作や沈黙の用い方が、普通の会話とどのように異なるのか——を分析し、また南極越冬隊員の心理調査から、人はどうやって困難な状況を乗り越えていくのかについて論じた。

第三部のパネルディスカッションでは、杉浦章介教授（経済心理学：慶大）の司会進行の下、第一部、第二部の演者全員とオーディエンスとの、きわめて活発な討論が行われた。

グローバルCOEでは5年間、人文科学から社会科学、自然科学に至るまで、多岐にわたる領域での研究が行われた。その成果を一般の方々とも共有する場として、今回149名にも上る聴講者が参加してくださった（その半数以上が一般の方々であった）ことに感謝したい。「こころ」の問題に対する人々の関心の高さ、そしてグローバルCOEによる研究成果を、社会に還元していくことの大切さをあらためて感じる機会となった。

(北中淳子)

On the 7th of January, 2012, the fifth joint Global COE symposium of Kyoto University and Keio University was held at Keio University on the theme of how to understand the human mind. Six researchers from the two GCOEs reported their latest findings from the perspectives of evolutionary psychology, developmental psychology, medical anthropology, group dynamics, cognitive neuroscience, and clinical psychology. This symposium was open to the public, students as well as researchers. The presentations were followed by active discussions on issues related to “kokoro,” which ranged from analyzing the human mind from laboratory animal experiments, understanding those who are psychologically distressed, to rebuilding communities in post-quake Japan.



鬱のジェンダー&こどもの心と病 ～精神医学と人類学の対話から～ 報告

(2012年1月28日 三田キャンパス東館6階G-Sec Lab.)

文化人類学グループでは去る1月28日に、「診断の揺らぎ 鬱のジェンダー&こどもの心と病」と題して三田でシンポジウムを開催した。二日前に開催された「統合失調症、人種、公民権運動：精神病をめぐる文化の政治学～Jonathan Metzl先生をお迎えして～」に引き続き「医療人類学の最前線」シリーズの第六回となる本シンポジウムは東日本大震災の影響で昨年度より延期されていたもので、今回満を持しての開催となった。医療・社会科学の各分野から50名の研究者が集まり、日米の精神科臨床におけるうつ病診断と、近年注目を浴びているこどもの心の病について、精神医学と文化人類学の立場からさまざまな知見が交わされた。

第一部の「鬱のジェンダー」においては慶大の北中淳子先生が、日本におけるうつ病がかつては働く男性において特に顕在化するものとされてきたのに対して、近年女性で診断を得るものが徐々に増えてきていることを指摘し、こうした展開を、長引く不況からくる徒労感と時代の不確かさという文脈に位置付けて分析を行った。一方、バンダービルト大学のJonathan Metzl先生は北米のうつ病の医療化において製薬業界が果たす役割の重要性について述べ、一般メディアや医療チャートにおけるうつ病の表象を分析することでジェンダーがその中でどのように捉えられているのかを考察し、医療化の過程・主体・社会的機能などについて日米のさらなる比較研究が求められていると呼びかけた。

第二部の「こどもの心と病」においては、まず国立病院機構肥前精神医療センターの黒木俊秀先生が、日本のこどものうつ病に対する親和性が指摘されている状況を受けて、その臨床的な表現型や大人のうつ病との連続性、薬物療法の効果と是非などに基づき、「こどものうつ病」という疾患概念とその診断に関する最新の知見について論じた。続いてテンプル大学の堀口佐知子先生が、「ひきこもり」当事者に対する医師による診断と当人のアイデンティティとの間の不一致を、「ひきこもり」に対する社会保障制

度等の政策的な文脈に位置付けて考察した。次に北海道大学の田中康雄先生が、精神科医療の専門性という点に焦点をあて、特に発達障害について、診断におけるカテゴリー的なアプローチとスペクトラム的なアプローチを融合させつつ総体的な生きづらさや適応の困難さを汲んだ支援の重要性について論じた。最後に本拠点の照山絢子が発達障害を持つ成人当事者の語りから浮き彫りになる「当事者性」の在り様を、これまでの障害者運動におけるそれと比較しつつ紹介した。総括として慶應大の宮坂敬造先生にコメントをいただいた。

全体を通して、精神医学と人類学の両分野から心の病をめぐる多様な話題が提供され、領域の垣根を越えて充実した意見交換がなされたシンポジウムとなった。司会是一部・二部とも慶應大医療人類学の北中淳子先生が担当された。

(照山絢子)

As part of the Medical Anthropology Series, this symposium brought together various scholars from the fields of psychiatry and anthropology for an interdisciplinary dialogue on issues such as depression, social withdrawal and developmental disorders. The speakers were: Jonathan Metzl (Vanderbilt University), Junko Kitanaka (Keio University), Toshihide Kuroki (Hizen Psychiatric Center), Sachiko Horiguchi (Temple University), Yasuo Tanaka (Hokkaido University) and Junko Teruyama (University of Michigan) (in order of presentation). The discussant was Keizo Miyasaka of Keio University.



fMRIと脳の講習会

Seminar Series on Brain Science

(2011年8月1～3・5日 三田キャンパス東館 4階セミナー室)

今年度は慶應義塾大学 GCOE「論理と感性の先端的研究教育拠点」(以下、GCOE と略す)の最終年度なので、これまでの fMRI と脳の講習会の活動全般について述べる。GCOE では 3 テスラの fMRI を導入した。文系主体の研究グループが研究用の fMRI を持つことは画期的なことであり、前身である 21COE で導入された近赤外線分光法 (NIRS) 装置とともに、慶應義塾のこの COE はヒトの脳機能画像研究を強力に推進することになった。しかし、文系であるが故に fMRI や脳に関する知識が十分とはいえない面もあった。そこで fMRI や脳に関する知識を普及することを当初の目的とした。

2007・2008 年度の講習会は連続的に行われたので、まとめて報告する。まず、fMRI の講習については、宮内哲 (通信研究機構)、泰羅雅登 (日本大)、河内山隆紀 (ATR) がそれぞれ fMRI の原理、実験の概要、データ分析について講演した (全 4 回。なお、講演者の所属は当時のものである)。脳の講習会に関しては、GCOE の関係者と招へいた外部の著名な研究者で講演を行った。講演者とテーマについて簡単に記す。学内の講演者は渡辺茂 (脳の進化)、小嶋祥三 (脳の基礎知識、自己、統合機能、聴覚と音声)、梅田聡 (記憶、社会的認知) で、学外の講演者は順不同で中村克樹 (国立精神神経センター; 情動)、泰羅雅登 (日本大; 行為)、武田克彦 (国際医療福祉大; 視空間失認)、丹治順 (玉川大; 運動)、伏見貴夫 (北里大; 言語)、杉下守弘 (新潟リハビリテーション大学院大; ラテラルティ)、田中啓治 (理化学研究所; 視覚認知)、渡邊正孝 (都神経科学総合研究所; 前頭連合野) であった。脳の基礎知識から高次認知機能まで幅広く紹介した (全 24 回)。

2009 年度は学内の関係者で講演を行った (全 21 回)。ただし、前年度の講演をビデオで紹介しつつ、新しい知見も紹介した。テーマについては前年度とほぼ同じであり、小嶋祥三が大部分を担当した。新しく加わった点を紹介する。研究法に関しては前年度の fMRI に引き続き、皆川泰代が NIRS について解説した。視覚については田谷文彦が講演した。聴覚と音声については皆川泰代が NIRS による発達研究を中心に紹介した。渡辺茂が脳の進化について講演した。なお、最後に「脳検定」を実施した。

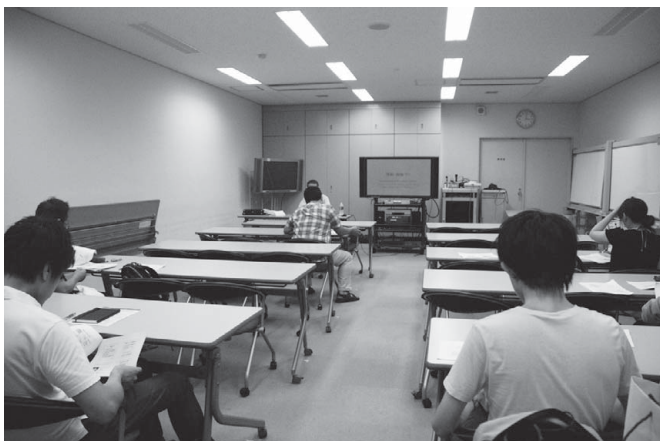
2010 年度は講演会の趣旨を一般の人への脳の知識の普及へと変更した (全 8 回、小嶋祥三が担当)。脳に関する知識がない中高生、年配の方まで多数の参加があった。機能脳画像研究の進展に伴い、脳研究が身近なテーマを扱えるようになった。その結果、脳研究がマス・メディアで取り上げられる機会も増えた。しかし、その多くは行動や心によって説明された脳の機能で、再び行動や心を説明している。この行動・心と脳の循環的な関係に対する注意から、脳の基礎知識、高次認知機能まで一通りの紹介をした。質問が多く出されたのが印象的で、脳に対する興味の高まりを感じた。

2011 年度は一転してすでに基礎知識を持っている大学院生、若手研究者を対象に新しい知見、今後研究の進展が期待されるテーマを感覚・知覚、運動・行為、記憶、情動・動機づけから選び紹介した (全 4 回、小嶋祥三が担当)。感覚・知覚に関してはフィードバック、トップダウン機能、運動・行為に関してはミラーニューロンと他者の運動の意図、記憶に関しては海馬の計算論の脳画像的検討、情動・動機づけに関しては賞罰による行動の維持と変更などである。

これらの講演により、学内外の学生、院生、若手研究者、さらには一般の人たちに脳の知識と脳研究の成果を伝えることができたと考えている。

(小嶋祥三)

The purpose of the Seminar Series on Brain Science was to expose young researchers to recent advances in brain research and instruct them the fundamental skills of operating neuroimaging devices, such as functional MRI and near-infrared spectroscopy (NIRS). A total of 61 lectures were held for the past 5 years. Lecturers were selected from among members of the Global COE and invited from other institutions. A wide range of topics was covered including brain anatomy—extending from neurons to brain structures—and functions of the brain—from sensation and perception to higher cognitive functions such as memory and language.



Kant's Transcendental Idealism in Focus Part IV

Jens Timmermann博士講演会

“Kantian Dilemmas? Moral Conflict in Kantian Ethics”

(2011年11月10日 三田キャンパス東館6F G-SEC Lab)

2011年11月10日に、セント・アンドルーズ大学Jens Timmermann博士の講演会“Kantian Dilemmas? Moral Conflict in Kantian Ethics”が開かれた。本講演は、2009年から本拠点にて開催してきた連続講義シリーズ“Kant's Transcendental Idealism in Focus”の最後を飾るものであり、また、本シリーズでは初めてカント倫理学をテーマとするものであった。博士は、西洋倫理学の古典として広く読まれている「道徳形而上学原論」の詳細なコメンタリーを始め、その堅実かつ鋭利なテキスト読解において国際的に高い評価を受けているカント研究者である。

今回の講演は、タイトルからも窺えるように、カント倫理学における道徳的対立の問題の扱いを主題とするものであった。一般にカント倫理学は、「嘘をついてはならない」というような道徳上の義務を例外なく課すものであり、そのため道徳的義務のあいだの対立は許容しない立場であると考えられがちである。これに対して博士は、カントが義務そのものと義務の根拠を区別していることに着目すれば、カント倫理学において、義務そのものの対立は概念的に不可能だとしても、義務の根拠のレベルで道徳的対立が可能であることが明確になると論じられた。もちろん、この議論によっても、カントが道徳的対立を詳細に検討しなかったという事実が消えるわけではない。博士は、この事実にはカントが道徳的対立に哲学の限界を見ていたことの反映であり、道徳的対立をめぐるカントの叙述は、徳ある人間の正しい判断に対する彼の信頼を示すものであると主張された。

講演は博士らしく、カント解釈上の複数の問題に深く立ち入って検討するものであった。それだけにカントの専門家でなければ問題の所在がつかみにくいのではないかという心配もあったが、当日はカント研究者以外の参加者からも多くの質問の手があがった。講演後は、こうした雰囲気も本連続講演シリーズの成果のひとつと言えるのではないかと考えを改めた次第である。

(村井忠康)

Dr Jens Timmerman (University of St Andrews, UK) gave a lecture as part of the lecture series “Kant's Transcendental Idealism in Focus”. The topic was Kant's treatment of moral conflicts. Dr Timmermann argued that contrary to the common image of Kantian ethics, Kant makes room for certain kinds of them.



論理学・数学の哲学セミナー The Philosophy of Logic and Mathematics Seminar

(2011年12月19日 三田キャンパス南校舎7階474教室)

2011年12月19日に、京都大学文学研究科博士課程の伊藤遼さんと、関西大学社会学部の大西琢朗さんを招いて、論理学・数学の哲学に関するセミナーを開催した。

伊藤さんは、イギリスの論理学者・数学者・哲学者であり、有名なパラドクスの名前にもなっているB・ラッセルの言語観に関して講演された。ラッセルは、彼の名前を冠したパラドクスの解決を、有名な『プリンキピア・マテマティカ』において提示したが、その前に書かれた『数学の諸原理』から、その言語観や言語に対する哲学的態度に関して、様々な変化をとげたことが知られている。講演の趣旨は、その変化の根底にある思想的バックグラウンドを探るというものであった。

大西さんは、論理哲学において、論理的なことばの意味（たとえば「かつ」「ならば」）の意味を、証明という実践から与える証明論の意味論について講演された。従来の証明論の意味論は、「主張」という概念をキーにして構成されてきたが、近年、「主張」と「拒絶」という二つの概念をもちいる新たな試みが提案されてきた。講演の趣旨は、従来の証明論の意味論ではとらえきれなかった、「主張」と「拒絶」の双対性を、この新たな証明論の意味論の枠組みから検討し直す、というものであった。

講演会当日は、学外からも積極的に先生方、学生の方々にご参

加いただき、二時から七時過ぎまで、長時間にわたり活発な議論が行われた。さらに哲学、論理学、数学などバックグラウンドの異なる方々の間で活発な議論が行われてことを記しておきたい。

(秋吉亮太)

The Philosophy of Logic and Mathematics Seminar was held on 19th December, 2011. Dr. Ito gave his talk on the transition of Bertrand Russell's philosophy of language between “The Principles of Mathematics” and “Principia Mathematica.” Dr. Ohnishi gave his talk on the duality of assertion and refusal from the viewpoint of the bilateralism in proof-theoretic semantics.



Keio-South Florida Joint Seminar

(2011年12月2-3日 南フロリダ大学)

2011年12月2日、3日にわたり、南フロリダ大学にて、第3回慶應—南フロリダ大学合同セミナーが清水透南フロリダ大学教授の差配により開催された。

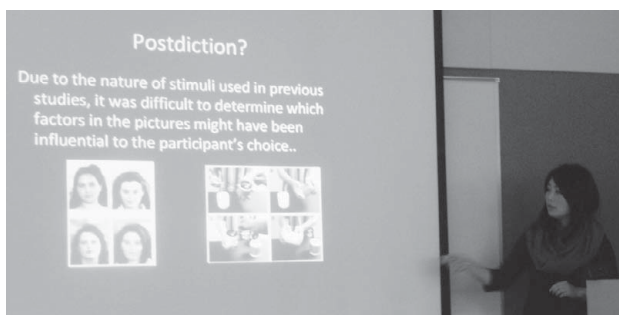
初日は、動物を扱った研究の発表が行われた。冒頭で、南フロリダ大学心理学科長 Michael Brannik 博士及び、渡辺茂拠点リーダーの挨拶があり、続いてハトのフレキシビリティにおける背側視床 (Uysal)、家雀の拡散における生理行動的可塑性の役割 (Liebl)、ラットにおける幹細胞移植 (篠塚)、お昼を挟んで、マウスの絵画弁別と選好 (渡辺) とそれぞれの研究発表が行われた。対象動物は鳥類とげっ歯類にまもっていたが、研究目的や手法は多岐に渡り、動物を使った行動神経研究の幅の広さを感じられるプログラムだった。発表時間は質疑応答を含め一人40分だったが、それぞれ心理学系、生物学系、医学系などバックグラウンドが異なる発表者と聴衆が活発な議論を交わした。午後の渡辺拠点リーダーの発表の時には、さらに美学系の教員などが加わり計50人弱が集まった。初日は、動物がメインなテーマだったにも関わらず、ヒトを対象にした研究者も活発に議論に参加し、また、慶應の参加者も南フロリダの発表者に積極的に質問していて、研究者間、学問間の垣根を越えた交流が行われた。

2日目は人間を対象にした研究発表が行われ、慶應からは玉田が文脈とマンガの表現形式がマンガの読み方略に与える影響、桃生が中国語話者による第二言語としての日本語の省略構文の獲得、大森が発達障害児に対する画像・音声・言語を組み合わせた支援プログラムの作成とその効果、増田が認知過程と認知内容の言語による自己報告についてそれぞれ発表を行った。各発表者の内容は非常にバラエティに富んでいたが、その根底には人間の認知メカニズムに対する興味が共通してあるように感じられた。そのためフロアからはそれぞれ異なる専門分野にも関わらず多くの質問やコメントが積極的に出され、非常に活発な議論が行われた。質疑応答の時間が終わっても、休憩時間に質問や議論をしている姿が見られ、参加者の関心の高さが伺われた。また、議論の中で日本とアメリカの文化の違いが話題となることもあり、本セミナーでは異分野交流に留まらず異文化交流が促進されたとも言えるであろう。

セミナー以外の時間でも、お昼休憩やセミナー終了後の時間を有効に利用し、USFの院生との交流の場や、大学構内を見学する機会を積極的に作っていただいた。一日目のセミナー終了後は、おそらく部外者は一切立ち入ることのできない Department of neurosurgery and brain repair の研究所や実験室の内部を金子祐治先生に案内して頂いた。厳重な管理のもとで保管された薬品や見慣れない実験器具、そしてまさに今研究途中の細胞などを詳しい解説付きで見せて頂いた。最先端の研究成果が生まれるその場を間近で見ることができ、自分が今その場にいることに、何かとても不思議な感覚を覚えた。また二日目のセミナー終了後には、Happy Holiday Party にも特別に参加させていただいた。自身の作詞作曲で院生生活を歌うパフォーマンスやクイズ大会、これぞアメリカといった大量のパーティー料理があり、日本の院生生活とは異なる、USFの院生生活の一部を体験させてもらった。御陰で研究関連のみならず、様々な面においての意見交換ができ、大変有意義な滞在となった。また清水博士のご厚意により、本セミナー発表者の全員のメールアドレスを参加者に伝えていただいたため、本セミナーが終わっても、更なる議論や意見交換などの学術的交流が続いていくことが期待される。清水先生をはじめ、金子先生、お世話になった院生方には深く感謝申し上げたい。

(玉田圭作、桃生朋子)

On December 2nd and 3rd, the third Keio-South Florida Joint Seminar was held at University of South Florida (USF). Presentation topics in the first day were animal research including sensory motor control, and animal aesthetics. After the first day seminar, we were invited to the Psychology Department Holiday Party. On the second day, topics on human researches including Manga reading, ellipsis construction, literacy acquisition and choice blindness were presented. We even had a chance to visit several USF neuroscience and psychology laboratories. It was a great opportunity for us to communicate with the researchers from various kinds of research areas. (Mikimasa Omori)



第4回 Keio-Gachon NRI ジョイントシンポジウム

The 4th Keio-Gachon NRI Joint Symposium

(2012年1月19日 嘉泉医科大学神経科学研究所(韓国))

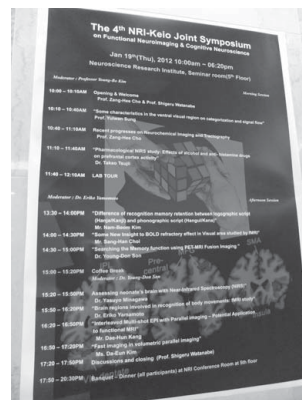
1月19日に本拠点と嘉泉医科大学のKeio-NRI ジョイントシンポジウムが行われた。毎年行われるシンポジウムであるが、4回目となる今回は韓国・仁川の嘉泉医科大学神経科学研究所(Neuroscience Research Institute: NRI)にて開催された。慶應義塾からは拠点リーダー渡辺茂、Sung Yulwan、辻井岳雄、山本絵里子、皆川泰代の5人が参加した。NRIはMRI、PETなどの開発、その先端的技术を用いた脳画像の応用研究など、比較的医工学寄りの脳科学が盛んに行われている。その中でも今回は更に進化したPET-MRIを見学することもできた。検査対象者の動きに合わせて装置自体が動くこの新しいPETはNRI所長のZang-Hee Cho教授の開発によるものであり、今回の滞在でも折にふれて核磁気共鳴の歴史ともいえる教授のエピソードを拝聴した。現在は14テスラMRIの建設に向けてプロジェクトが進行中とのこ

とである。

シンポジウムでは慶應側からは、MRIやNIRSを用いた認知神経科学を中心とする発表が行われた。NRIからはZang-Hee Cho教授によるNRIで行われている研究概要の紹介を筆頭に、高磁場MRIの高速度撮像の試み、ハンゲル・ハンチャ読字と記憶スパンの関係、記憶課題における海馬の活動などの発表が行われた。特にPET-高磁場MRIを用いて、海馬の下位区分(例、歯状回、CA1)レベルでの脳活動を被験者群別に比較するという記憶課題研究は、最先端技術を持つNRIならではの研究であり圧巻であった。これらの研究は認知神経科学、心理学の我々の観点からは、まだ一層の伸び代があるように思えるし、逆にNRI側から見る我々の研究にも技術方法的に改善工夫の余地があるであろう。本拠点終了後にも何らかの形でお互いの利点を活かした、共同研究、交流が今後とも発展することを強く望む。(皆川泰代)



The 4th Keio-Gachon NRI Joint Symposium was held on the 19th of January at Neuroscience Research Institute at Gachon University, Korea. Researchers from both institutes presented their study and had a frank and meaningful discussion. We also had a chance of lab tour and were impressed by their cutting-edge techniques of brain imaging such as fusion PET-MRI.



2011年度プロジェクト科目報告会

Oral Presentations by Graduate Students in Project Course 2011

(2012年2月7日 三田キャンパス大学院校舎312教室)

2012年2月7日(火)、2011年度プロジェクト科目報告会が行われた。まず慶應人文グローバルCOE拠点リーダーの渡辺茂教授より挨拶があり、その後、履修者から報告がなされた。最初にプロジェクトEの山本奨氏(音楽作品とは何か)による報告があり、次にプロジェクトCの藤田麻友美氏(メタ言語意識と外国語学習の関係)、大野賢一氏(自伝的記憶と物語文読解後の記憶の構造の検討)、永井敦氏(The Effect of Metalinguistic Ability on Foreign Language Learning)、吉原友美氏(日本語否定接頭辞の語形成)、野中滋氏(課題価値の強調が「教師の仕事内容」に対する興味に与える影響)、桃生朋子氏(中国語母語話者による日本語主語省略構文の獲得)より報告があった。最後にプロジェクトAの江藤啓介氏(Economic Profits Enhance Trust, Perceived Integrity and Memory of Fairness in Interpersonal Judgment)、玉田圭作氏(4コマ漫画の速読と眼球運動)の報告があった。報告終了後、各プロジェクト責任者から講評が述べられ、最後に渡辺教授より履修者に修了証が授与された。

プロジェクト科目があることで、分野の垣根を越えた議論およ

び研究を定期的に行うことができた。プロジェクト科目は今年度をもって一旦終了するが、このような機会は是非継続して設けていきたい。

A debrief session for “Project course 2011” was held on 7th February 2012. After nine presentations were given, each student was awarded a certification of completion.



平成 23 年度若手研究成果報告会

Annual Seminar of Young Researchers

(2012年2月8・9日 東館4階セミナー室)

2012年2月8・9日、二日に渡って、三田キャンパス東館4階セミナー室において、平成23年度若手研究成果報告会を開催した。同会には、本人文グローバルCOEの若手研究者20名と、本GCOEの事業推進担当者が参加し、熱のこもった発表および質疑応答が行われた。

初日の午前中のセッションでは、主に動物を対象とした研究の成果の報告が行われた。拠点リーダーの渡辺茂文学部教授から開会の挨拶が行われた後、山崎由美子特任准教授より、コモンマーマセツが道具使用を学習する際にどのように般化が行われるのかについて発表があった。次に、一方井祐子研究員より、セキセイインコによる、つがい相手との間での闘争後第三者親和交渉について研究の報告が行われた。続けて、近藤紀子非常勤研究員が、ハシブトガラスが個体認知を行う際に、声と姿を統合しているか、また声と姿の統合には社会交渉が必要かを検証する実験の結果を報告した。最後に、柴田みどり非常勤研究員より、fMRIによるユーモア理解の処理に関わる神経メカニズムの研究成果について報告が行われ、午前中のセッションを終えた。

午後は、7件の発表がおこなわれた。まず、脳と進化班から四本裕子特任准教授と桑原明栄子非常勤研究員が「人間の視覚情報処理過程の検証」、田谷文彦特任助教が「認知的および感情的フィードバックの処理に関わる神経機構の解明」、寺澤悠理非常勤研究員が「内受容意識と感情の認識」を発表した。続いて哲学・文化人類学班の秋吉亮太特任助教による「形式主義の再検討に向けて」、論理・情報班の村井忠康非常勤研究員による「カントと概念主義」、哲学・文化人類学班の鈴木康則非常勤研究員による「神と動物—デリダの神学的動物論」の発表がおこなわれた。

二日目は午後から遺伝と発達班2名、言語と発達班3名、哲学・人類学班5名による報告会が行われた。前半は、遺伝と発達班から、GCOE赤ちゃんラボでの乳児を対象とした脳機能および行動研究、慶應大学NICUでの新生児脳機能研究、CARLSと提携のあるフランスENSとの乳児脳機能についての共同研究、乳児を対象としたオムツ触感の快・不快における行動の異なりに関する研究、健常新生児と未熟児による母親声と非母親声の聴き分けの差異に関する研究等が報告された。続いて言語・認知班は、母語

処理における処理スピードの速さと外国語の能力との関係・言語以外の記号体系（例えば数学）処理能力との関係についての脳科学的研究、顔の再認課題前に従事していた課題が顔の再認に与える影響についての実験的検討、第二言語獲得者による定名詞句・不定名詞句の区別に関する研究を報告した。後半は哲学・文化人類学班からの5名が報告を行った。医療人類学の立場からは、3名が、糖尿病の治療薬という「もの」の民族誌を通じて患者の経験という感性的側面と薬の効果という論理的側面との関係を論じる研究、発達障害者のcureとcareを巡る療育現場での実践についての研究、自閉症児が経験している感覚世界に焦点を当てた音楽療法プロセスの意味についての研究が報告された。美学の立場からは、L.ヒルシュフェルト＝マックの映像作品《色光運動》を中心に1920年代ドイツにおける「結合メディア」としての触覚に焦点を当てた研究、テレマンの出版楽譜における彫版スタイルから出版年代を再考する試みが報告された。

2日間を通して、多岐にわたる内容が出題され、20名の報告が行われた。拠点リーダーの渡辺先生の言葉どおり、「お互いに学びながら成長する」ことが改めて実感でき、またさまざまな分野の対話を通じて、これからも論理と感性の研究が発展し続けることが望まれる。

(田谷文彦、四本裕子、三宅博子、モハーチ・ゲルゲイ)

The fourth Annual Seminar of Young Researchers was held in the Seminar Room of the East Building at Mita campus, Keio University on February 8-9, 2012. In this meeting, young researchers including associate professors, assistant professors and researchers in CARLS reported about their recent research activities and study results. Members of the GCOE as well as guests from different fields involving neuroscience, genetics, psychology, philosophy, linguistics, anthropology and logics discussed each topic in a highly interdisciplinary setting demonstrating once again the scientific and practical possibilities that lie between logic and sensibility and ahead all of us.



活動報告

タイトル	開催日・会場	主催・共催・企画	企画者	講演者・参加者
『演繹の正当化』とその周辺 フレーゲとヒルベルト的形式主義	9月16日 三田キャンパス 大学院棟4階 348教室	哲学・文化人類学班	高橋優太	秋吉亮太(哲学・文化人類学班)
第3回日中哲学フォーラム	11月19・20日 日吉キャンパス 来往舎	日本哲学会 共催：当拠点	—	謝地坤、加藤尚武、谷徹、王青、納富信留、孫晶、和泉ちえ、郭連友、賀雷、菅田大介、杉田孝夫ほか
Kant's Transcendental Idealism in Focus Part IV Kantian Dilemmas? Moral Conflict in Kantian Ethics	11月10日 三田キャンパス 東館6階G-sec Lab	論理情報班	村井忠康	Dr. Jens Timmermann (University of St Andrews)
Behavioral Resurgence —Echo of the Past/Herald of the Future—	11月12日 三田キャンパス 北館3階大会議室	文学部教授	坂上貴之	Kennon A. Lattal (West Virginia University)
Executive Functions and Working Memory: Implications for Different Domains of Psychology	11月26日 三田キャンパス 大学院校舎1階 312教室	脳と進化班	梅田 聡	三宅晶(Department of Psychology and Neuroscience, University of Colorado at Boulder, U.S.A.)
Keio-USF Joint Seminar	12月2・3日 南フロリダ大学	国際教育研究プログラム	—	増田早哉子、玉田圭作、金井将希(脳と進化班)、 大森幹真(遺伝と発達班)、桃生朋子(言語と認知班)
『数学の諸原理』におけるラッセルの 言語観 双側面説の擁護	12月19日 三田キャンパス 東館4階セミナー室	哲学・文化人類学班	飯田 隆 秋吉 亮太	大西琢朗(京都大学)、伊藤遼(京都大学)
バイオサイコシンポジウム Age-associated changes of brain morphometry in the early visual cortex	12月20日 三田キャンパス 東館4階セミナー室	脳と進化班	渡辺 茂 四本裕子	Li-Hung Chang (Boston University)
Cognitive Spread: Under What Conditions Does the Mind Extend into the World?	1月6日 三田キャンパス 大学院棟5階 357B教室	哲学・文化人類学班	飯田 隆 秋吉亮太	Zed Adams 高橋優太(哲学・文化人類学班)
第5回 京都大学－慶應義塾大学 グローバルCOE 共催シンポジウム	1月7日 三田キャンパス 東館6階G-sec Lab /5階会議室	全体	渡辺 茂 山本淳一 子安増生	渡辺茂、梅田聡(脳と進化班)、山本淳一(遺伝と発達班)、 北中淳子(哲学・文化人類学班)、 杉浦章介(慶應義塾大学グローバルCOE)、 子安増生、杉本均、杉万俊夫、桑原知子(京都大学)
Keio-Gachon Joint Seminar	1月18・19日 Gachon大学	国際教育研究プログラム	—	渡辺茂、辻井岳雄、山本絵里子(脳と進化班)、 皆川泰代(遺伝と発達班)
医療人類学の最前線Ⅴ： 統合失調症、人種、公民権運動： 精神病をめぐる文化の政治学 ～Jonathan Metzl先生をお迎えして～	1月26日 三田キャンパス 大学院棟346教室	哲学・文化人類学班	北中淳子	Jonathan Metzl (Vanderbilt University)、 鈴木晃仁(慶應義塾大学)
医療人類学の最前線Ⅵ： こどもの心・病・文化： 診断の揺らぎをめぐる 精神医学と 人類学の対話から	1月28日 三田キャンパス 東館6階G-sec Lab	哲学・文化人類学班	北中淳子	Jonathan Metzl (Vanderbilt University)、 照山絢子(ミシガン大学)、黒木俊秀(九州大学)、 田中康雄(北海道大学)、堀口佐知子(テンプル大学)、 宮坂敬造、北中淳子(哲学・文化人類学班)
プロジェクト科目報告会	2月7日 三田キャンパス 大学院校舎1階 312教室	全体	—	プロジェクト科目履修者
2010年度若手研究成果報告会	2月8・9日 三田キャンパス 東館4階セミナー室	全体	—	特別研究教員、非常勤研究員全員、佐藤康太(慶應義塾大学)
Onto-logical Things and Anthropological Matters	2月11日 三田キャンパス 東館4階セミナー室	哲学・文化人類学班	宮坂敬造	Casper B. Jensen (IT University of Copenhagen, Technologies in Practice Research Group), Fabio Raphael Gygi (Doshisha University, Department of Sociology)
カンボジア虐殺の生き残り、その子供 への治療的関わりなど、豪州とカンボ ジアでの調査経験をふまえて、トラウ マを背負う人々の文化的権利について 討議	2月27日 慶應義塾大学 三田校舎・南館5F ディスカッション ルーム	哲学・文化人類学班	宮坂敬造	Peg Levine (Monash University, Asia Institute)
小嶋祥三先生記念講演	3月1日 大学院校舎 312教室	関係者		小嶋祥三(脳と進化班)
タイトル未定	3月9日 三田キャンパス 東館4階セミナー室	哲学・文化人類学班	宮坂敬造	吉田尚史(東邦大学) 松嶋健(京都大学) 島蘭洋介(金沢大学) 井口かをり(哲学・文化人類学班)
脳科学を未来につなぐ	3月11日 三田キャンパス 北館ホール	脳と進化班	川畑秀明	渡辺茂(脳と進化班)、藤井直敬(理化学研究所)、 宮内哲(情報通信研究機構未来ICT研究所) 棚島次郎(東京財団)

グローバル COE 私的総括

グローバル COE プログラム「論理と感性の先端的教育研究拠点形成」は5年の月日と1,178,114,000円の直接経費、216,105,000円の間接経費をかけ、この3月に終了する。8名の海外事業推進担当者を含む35人の事業推進担当者、9名の特任教員、16名の研究員を擁し、MRI、NIRS、TMSなどの脳研究施設、マーモセット研究施設、カラス研究施設を持つ Centre Of Excellence の名に恥じない拠点が予定通り形成されたといつてよい。拠点リーダーとしては肩の荷が降りた気分である。以下、これまでの活動を私的に総括したい。

組織、運営、民主主義

本拠点の本大学での位置づけは先導研究センターのひとつである。先導研究センターとは外部資金によって運営される研究センターの総称であり、全体の長は研究担当理事が務める。拠点の運営では拠点リーダーの下に関係する研究科委員長からなる幹事会を設けた。これは拠点が大学院教育と密接な連携のもとに運営されるからである。実際には研究科の方で委員長の交代などがあり、前委員長が幹事を務める場合もあった。通常の運営はこの幹事会で行い、予算と決算のみ各種委員会の長による運営委員会で行った。お気づきのことと思うが、この運営体制は体よくいえばトップダウン、有り体に言えば拠点リーダーの独裁である。そのような組織にした理由は大学教員がそれぞれ忙しくて日程調整が難渋することと多くの教員は拠点運営などに興味がないからである。一方で、なにかを告白すること（profess）が教授の仕事であるから、会議にできればそれぞれその場の思いつきで発言するので迅速な決定ができない。そのような訳で独裁に近い運営をしたが、民主主義を信奉する先生方には随分専横な拠点リーダーに見えたと思う。ただ、可能な限り各種委員会に決定権を移譲し、研究者が自主的に判断決定できる範囲を広くした。

事務部門は大学の研究支援センターに所属し、3名が常勤を務めた。事業推進担当者はもとより拠点リーダーといえどもいわばパートタイムであるから、常勤の事務部門の能力が拠点の運営の正否を大きく左右する。そこで僕も可能な限り短時間でも毎日事務部門に顔を出すようにした。途中何回か交替があったものの、僕はこの拠点の事務部門を誇りに思っている。

融合研究、分業研究、そして個人

他の多くの GCOE 拠点が分野融合的であることを掲げた。しかし、多くの場合、それらは融合研究であるよりは分業研究にすぎないように思う。分野の融合は個人の中で実現されていなくてはならない。他分野の人と話ができる程度では分業の範囲を出ない。個人の内なる融合は、個人に極めて厳しい努力を強いる。僕自身が大学で受けた教育は実験心理学だが、電気生理、脳損傷、組織学、薬理学などの技法はそれぞれ他の研究機関で修行して習得したものである。そこで、拠点としては個人が出来るだけ効率的に他分野の知識、技術を習得できるような仕組みを大学院の科目改革、科目外の講座、講習会の設置などで作った。その結果、哲学

を専攻する大学院生が MRI の機械を操作したり、美術史を専門とする研究者が心理学の実験を行い、あるいは、もともとと言語の研究者だったものが新生児の脳活動を測定するといった状況を産み出した。一定の成功といえるが、なおかなりの若い研究者が「籠城主義」で自分の専門を少しでも外れると全く興味を示さない。ある時期に特定の研究に深く沈潜していくことの重要性はよく分かっているが、知的好奇心まで失うと元も子もない。若手育成の難しい問題といえる。

国際化、連携拠点、若手の成長

国際化も多くの拠点が目標として掲げたものである。若手については早期経験（early exposure）と発信力育成に力を注いだ。拠点は海外に5つの連携拠点を持ち、機関レベルで協定書を結び、若手による共同セミナーを毎年開催した。基本的にはこちらからは教授レベルのものは参加せず、若手同士の自主的な企画運営に任せた。ケンブリッジとのセミナーでは学寮での晩餐会のメニューなども一緒に決めたい。5年間で海外セミナーでの若手研究者の発言力は格段に進歩した。運営に携わった若手諸君に心から感謝する。国際学会での発表も支援し、多くの発表がなされ、また研究者間の個人的交流も活性化されたようである。アカデミック・ライティングの講座を設けたが、国際誌への投稿はもうすこし活発でもよかったかと思う。また、修士課程の大学院生への支援ができなかったのも規則とはいえ残念であった。

若手育成、若手雇用、そして散逸

GCOE は若手育成が看板である。僕の拠点は理系技術で武装した文系拠点であるので、脳科学の先端技術を導入した。GCOE の前身である 21 世紀 COE では研究機器としては4台目の納品となる全頭型光トポグラフィーを導入し、GCOE では当時医学部にもなかった3TのMRI機器を導入した。GCOE の採択審査の際には「教育拠点」に最新鋭機器は必要かという意見があったと聞くが、心ないことである。最新機器で訓練を受けてこそ最前線で即戦力となる人材を育成できるのである。

若手育成には訓練という面とは別に雇用や職位賦与という面がある。これは案外面倒であった。慶應義塾大学では研究科での人事と前述した先導研究センターとしての人事の両方が可能であったが、できるだけ研究科としての人事を行った。しかし、大学の学部や研究科はいわばアンシャン・レジームで運営されているので、外部資金によって雇用される研究者への職位賦与に抵抗感があった。僕としてはかなり忍耐強く説明したので、ある程度は理解してもらえたと思う。GCOE プログラム終了とともにこれらの雇用も終了する。我が国の今後の学術を担う優秀な人材を集めたので彼らの散逸は研究大学としては大きな痛手になろう。老婆心ながら、再度このような研究チームを構成するのは随分大変だろうと思う。

「論理と感性の先端的教育研究拠点」拠点リーダー 渡辺 茂

Personal reflection of CARLS

Global COE program “Centre for Advanced Education on Logic and Sensibility” is a direct cost of 1,178,114,000 yen month and five-year, over indirect costs of 216,105,000, yen to the end this March. I would say we have succeeded in establishing a Centre Of Excellence.

Organization, management, democracy

The manner I have managed the CARLS was top-down rather than democratic one. I believe it was efficient and productive for a short-lasting research center. Because all professors in CARLS were part-timer not full-time member, the success of the operation greatly depended upon the ability of the full-time administrative staffs and I was proud of the administrative staffs of this centre for their excellent work.

Division, fusion, individual

Interdisciplinary approach is listed in many GCOEs. However, in many cases, they are division of works rather than the fusion of disciplines. Such fusion has to be achieved in each researcher. We have tried to establish a system to facilitate such a real fusion as efficiently as possible.

Globalization, international collaboration, training of young scientists

Globalization of research is one main purpose of the CARLS. We concentrated from in early on to the exposure and development of ability of young scientists to international collaboration. We organized joint seminars with foreign universities young-scientists every year without the attendance of Japanese senior professors and I personally realize their great progress in their communicative skills.

Training, employment, dissolution

Another main purpose of the GCOE program is to train young scientists. Our GCOE is a centre of liberal arts, which is equipped with scientific instruments. We introduced NIRS, 3T MRI, TMS etc. Employment and giving professional advancement of young researchers has been another issue of the GCOE program and we have organized research teams with outstanding young researchers. Closing the GCOE program means termination of the employment. Dissolution of these outstanding research teams should be serious a loss for the academia and especially for research universities, like Keio.

プレスリリース情報

Depression in Japan Psychiatric Cures for a Society in Distress

Junko Kitanaka

Published by Princeton University Press, 2012



Since the 1990s, suicide in recession-plagued Japan has soared, and rates of depression have both increased and received greater public attention. In a nation that has traditionally been uncomfortable addressing mental illness, what factors have allowed for the rising medicalization of depression and suicide? Investigating these profound changes from historical, clinical, and sociolegal perspectives, *Depression in Japan* explores how depression has become a national disease and entered the Japanese lexicon, and how, in a remarkable transformation, psychiatry has overcome the longstanding resistance to its intrusion in Japanese life.

“In this beautifully nuanced book, Kitanaka documents the burgeoning of Japanese depression over the past decade. In portraying this phenomenon, she deftly draws readers into the intertwined worlds of pressure-

cooker work environments, individuals suffering deep malaise who are frequently suicidal, and the compassionate but at times conflicted practice of Japanese psychiatry. Suffering individuals are medicated, but psychiatrists, exquisitely sensitive to the oppressive ‘forces’ of society, also politicize depression.”—Margaret Lock, author of *Twice Dead: Organ Transplants and the Reinvention of Death*

“This is an important ethnographic, cultural, and historical account of a crucial topic in society. Illustrative and compelling.”

—Arthur Kleinman, Harvard University

“With its high quality, simplicity, and eloquence, it is bound to become *the* book on depression in Japan.”

—Adriana Petryna, University of Pennsylvania

カラスは仲間の「声」と「姿」を結びつけて認識していることを発見

——カラスの集団は“烏合の衆”ではなかった——

カラスの社会は“烏合の衆”といわれますが、近年の研究によって、相手の視点に立ってものを捉える能力や、他者の行動を観察することで学習する能力など、仲間同士の間で複雑な行動をしていることが明らかにされていました。しかし、その基礎となる他個体認識のメカニズムは不明でした。慶應義塾大学人文グローバル COE（論理と感性の先端的教育研究拠点）の近藤紀子研究員、伊澤栄一特任准教授、渡辺茂教授は、カラスが仲間の鳴き声と姿を統合して認識していることを発見しました。この成果は1月4日付けの学術専門誌 Proceedings of the Royal Society B（英国王立協会紀要）に掲載されました。

1. 実験の方法と結果

私たちは例えば友人を認識するとき、特定の人の声や姿などの情報を統合して“〇〇さん”という認識をしています。それゆえ、姿から声、声から姿を予測することができます。これは、話しかけた友人が、（風邪などで）いつもと違う声だと、敏感にそれに気づくことからわかります。

近藤研究員らは、実験的にこのような場面を設定し、ハシブトガラス（以下カラスとする）が仲間の姿から声を予測しているのかを調べました。網越しに2羽のカラスを静かに対面させた後、カーテンで仕切りました。直後に1羽を取り除くと同時に、カーテン越しに“隣の部屋にいた個体”あるいは“隣の部屋にいなかった個体”の鳴き声（コンタクトコール※）を再生する2つの条件を設け、残った1羽の反応を調べました。カラスが隣にいた個体の姿と鳴き声を結びつけて認識しているなら、隣にいる個体の声がしても驚きませんが、隣にいるはずのない個体の声が聞こえると敏感に反応するはずで、ここで、隣の部屋が見えない程度にカーテンと壁との間に小さな隙間を開けておき、鳴き声の再生後、カラスが隣の部屋を覗こうとする行動（右の写真参照）を上記2条件間で比較しました。その結果、“隣にいるはずのない個体”の鳴き声を再生すると、「すぐに」「長い時間」隣の部屋を覗きましたが、“隣にいる個体”の声を再生しても反応はみられませんでした。これは、カラスが隣にいた個体の鳴き声を予測している、つまり、他個体の姿と声を結び付けていることを意味します。さらに興味深いことに、このような反応は、実験前に一度も出会ったことのない個体間では見られませんでした。

これらの結果は、カラスが仲間の姿と声を結びつけて認識していることを示し、また、そのような個体認識は、他個体との関わり合いを通じて学習により成立することを示したものです。

2. 研究の意義

近年の研究によって、これまで“烏合の衆”と称されてきたカラスの群れは、極めて流動的かつ重層的な、いわば、規模や構成員の出入りの盛んな社会である可能性が少しずつ垣間見えてきました。本研究による発見は、そのようなカラスの複雑な社会が、互いを“個体”として認識することで維持構築されている可能性を示し、今後の社会生態の解明につながるものです。さらに、鳥類は視覚、聴覚ともに優れていることが従来から知られていましたが、本研究は、それらの異なる感覚が統合され“他者”という概念を形成していることを鳥類で初めて示したものです。哺乳類とは異なるつくりをもつ鳥類の脳においてどのように異なる感覚が統合されているのかを明らかにする突破口ともなり、社会生態だけでなく脳とその情報処理の進化の理解に貢献することが期待されます。

3. 発表論文

論文名：Kondo, N., Izawa, E.-I., and Watanabe, S.
(2012) Crows cross-modally recognize group members but not non-group members

掲載雑誌：Proceedings of the Royal Society B
電子版掲載日：2012年1月4日

※コンタクトコール

個体間の様々な音声コミュニケーションに用いられる鳴き声の1種で鳥類、哺乳類に広く見られる。近藤研究員らの過去の研究によって、ハシブトガラスのコンタクトコールは個体ごとに音がわずかに異なる“個性”をもつことが判明している。



慶應義塾大学 論理と感性の先端的教育研究拠点
Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility
Newsletter 2012, March, No. 18

発行日 2012年3月31日

代表者 渡辺 茂

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

慶應義塾三田研究支援センター気付

TEL : 03-5427-1156

FAX : 03-5418-6728

keiocarls@info.keio.ac.jp

http://www.carls.keio.ac.jp/